



全体会議で科学とスポーツのかわりについて発表するこども記者たち。いずれも東京都江東区の日本科学未来館で

未来のスポーツ

科学が主役に?

科学の力によってスポーツはどう変わっていくのでしょうか。私たちこども記者5人が25歳になり、オリンピックイヤーでもある「2032年」を予想してみました。バラ色の未来だけでなく、課題も浮かんできました。みんなで考えたのは、主役は誰なのかということです。

可能性と課題 「境目難しい」

テーマは「科学の力で20×年のスポーツ界は?」。初日の分科会では、スポーツがどのように変わろうとしているのか、こども記者がそれぞれの地元で事前に取材したことを発表し、話し合いのきっかけにしました。

新潟日報社の阿部倅奈さんは、スポーツウェアを製造する新潟県長岡市の「オンヨネ」を取材してきました。アプリと連動して色やデザイン、サイズを変えたり、体調管理や技術測定が可能となるスキーウェアを自分自身で考えました。

神戸新聞社の松野由季奈さんは、神戸市のスポ

ーツメーカー・アシックスの研究施設「スポーツ工学研究所」を取材。義足のアスリート向けに開発されたスパイクソールについて発表しました。中日新聞社の伊藤可南子さんと足立壮さんは、トヨタ自動車が開発した

バスケットボールロボットの取材を基に、未来のスポーツでロボットが活躍する可能性や課題を示しました。科学が行きすぎた場合、目を向けたのは、茨城新聞社の藤野里恵花さんでした。スポーツを科学



分科会では科学が行きすぎた場合の影響も話し合った

来年の東京オリンピックの体操競技では、3Dレーザーセンサーによる採点支援システムが導入されます。日本体操協会と共同で開発してきた富士通スポーツ・文化イベントビジネス推進本部の田野中輔さんに話を聞きました。

体操の採点支援装置 記者が体験

田野中さんは世界陸上にも出場した110センチハイドルのトップアスリートでした。開発中のシス

テムは選手の体にレーザー光線を当てて距離を測り、動きを立体的に記録するための装置です。目で見ただけでは分かりにくいひねりの回転数や倒立の角度などをリアルタイムでデータ化し、審判による採点を補助します。こども記者はサミット会場でシステムを実際に体験。順番に手足を動かしながら、プロジェクトに映し出される自分



田野中さんの指導で採点支援システムを体験する記者

阿部倅奈さん「みんなのいろんな考えを聞くことができて楽しかった」
藤野里恵花さん「自分の考えをちゃんと持ち、しっかり主張することが大切だと学んだ」
松野由季奈さん「自分もマラソン選手の給水ボラ

的に研究している筑波大学の小池関也准教授を取材。水の抵抗を少なくする水着で世界記録が連発し、着用品が禁止されたことを例に「スポーツと科学技術の境目は難しい」と話しました。

チーム全員が、科学とスポーツの関係は簡単ではないと感じながら1日目を終えました。上手な活用へルールが必要2日目の全体会議では、予想する未来を2032年とした上で①科学が進歩することへの期待②科学が行きすぎた場合の影響や課題③の2つの面を発表することにしました。本番では「選手の技能を高めるには、練習の仕

「全国に仲間できた」サミットに参加して
伊藤可南子さん「全国に仲間ができ、新聞記者などの将来の夢に一つ近づけたかな」
足立壮さん「違う意見をお互い納得するようにまとめる過程が面白かった」

◇このページは、中日新聞社が編集しました

わたしたちが取材しました



いとうかなこ 伊藤可南子 記者 (愛知・小6)



あだちそう 足立 壮 記者 (愛知・小6)



中日新聞社



とうのりえか 藤野里恵花 記者 (茨城・小6)



茨城新聞社



あべけきな 阿部倅奈 記者 (新潟・小6)



新潟日報社



まつのゆきな 松野由季奈 記者 (兵庫・小6)



神戸新聞社

子どもがスポーツする理由は？

読売KODOMO新聞、週刊しもつけ子どもタイムズ(下野新聞、栃木)、週刊風つ子(上毛新聞、群馬)、南日本子ども新聞オセモコ(南日本新聞、鹿児島)の4紙の子ども記者は、「スポーツ×教育」をテーマに、子どもがスポーツをする理由について考えました。



「スポーツをする理由」について議論した成果を発表する分科会のメンバー

北京五輪陸上男子400メートルリレー銀メダリストの末続慎吾さん

人間力も養われる



前橋育英高校サッカー部・山田耕介監督に取材する渋谷隼斗さん

高校サッカーの名門・前橋育英高校を訪ねたのは、「週刊風つ子」100人以上のサッカー部員を束ねる山田耕介監督(59)と、渡辺綾平キャプテン(17)に話を聞きました。山田監督は「自分で考えて行動できる選手が伸びる。寮生活を通じて、人間力も養われる」と強調。渡辺選手は「チームをまとめるために、模範となるような行動を心がけている」と話しました。

楽しさを挑戦する

色々な分野で役立つ



サミットの開催にあたり、参加する子ども記者たちが、それぞれの地域でスポーツの現場を取材しました。(肩書、年齢は当時)



インタビューに挑戦する上山琉衣さん(左)と山口晴香さん

「週刊しもつけ子どもタイムズ」は、自転車ロードレースチーム「宇都宮ブリッツェン」取材しました。2018年に3度目の総合優勝を果たした強豪です。協力してくれたのは、阿部高之選手(32)と堀孝明選手(26)。子どもがスポーツに取り組む理由を尋ねると、「失敗しても、挑戦していく力を身につけられる。色々な分野で役立つはず」と声をそろえました。

こだわりのながらも、負けにも価値を見いだす「勝負至上主義」が大切だ」と語りました。その後、子ども記者は、取材を元にスポーツをする理由について議論。「全力で取り組むことが大切」仲間との絆を深めるに

はスポーツが一番など意見を出し合いました。最後にみんなの意見を総合して、「子どもは目標を立てて、全力を尽くし、挑戦する楽しさを見つけるためにスポーツをする」と提言にまとめました。

体 どんどん動かして



北京五輪陸上男子400メートルリレー銀メダリスト・朝原宣治さんに取材する上野陽馬さん

読売KODOMO新聞が取材したのは、2008年の北京五輪陸上男子400メートルリレーで銀メダルを獲得した朝原宣治さん(46)。スーツ姿で子ども記者のインタビューに応じた朝原さんは、「体はどんどん動かした方が良いでしょう」と笑顔。「本気でスポーツに取り組むとつらいことも出てくる。楽しくなければ続かないので、気軽に楽しむことも大切です」と話してくれました。

友人 たくさんできた



別府林瑚さん(右)に水球について話を聞く田代紅愛さん

「南日本子ども新聞オセモコ」は、水球で全国大会出場を果たした原田学園スイミングスクール(鹿児島市)の練習場におじゃましました。チームには、幼児から中学生まで約40人が所

属。キャプテンの中学3年、別府林瑚さん(15)は「水球を通じて、全国にたくさんの友人ができました。シュートを決めた時の達成感も大きい」と魅力力を語ります。

◇このページは、読売新聞社が編集しました

わたしたちが取材しました



くらもちこみ 倉本心美 記者 (東京・小6)



うえのようま 上野陽馬 記者 (大阪・小6)



やまぐち はるか 山口晴香 記者 (栃木・小6)



かみやま りな 上山琉衣 記者 (栃木・小6)



しぶさきはたと 渋谷隼斗 記者 (群馬・中1) 上毛新聞社



たしろくはあ 田代紅愛 記者 (鹿児島・小6) 南日本新聞社

キラリ

地域活性化案次々と



分科会「地域振興①」のテーマは「スポーツで自分のまちを盛りあげよう」。北海道、宮城、長野、島根、愛媛の子ども記者6人が、それぞれの地元で行われているスポーツの取り組みを紹介。それらをもとに、課題や「こんなことができる!」というアイデアを考えました。

■ 島根の玉造温泉街で開かれるスリッパ卓球大会については、「参加者をもっと増やしたい」という課題が。記者たちはどうしたらいいか話し合い、「温泉好きな人やスリッパ職人、卓球選手など、それぞれ

れの分野の人を呼ぶ」という活性化策を思いつきました。客席との距離が近いサッカー場などは臨場感が味わえる反面、「ボールが飛んできて危ない」との声も。これには、「ボールから観客を守るロボットを活用しては」との斬新な意見が出ました。さらに、「小学生がリクエストしたスポーツ選手を体育の授業に呼ぶ」「eスポーツを取り入れ、お年寄りも参加しやすくする」など、まちを盛り上げるアイデアが次々とあがりました。

■ 最後に全体会議で発表するチームとしての提言、「みんなが笑顔に、いつも話題になるように、多様で多世代の人がスポーツにふれる機会をつくろう」をまとめました。

曾田さんは2009年にJリーグの北海道コンサドーレ札幌を引退。東日本大震災が起こった11年、それまで知り合

いではなかった他分野のアスリートたちに「一緒に東北を支援しよう」と呼び掛けました。全員の顔写真と、震災への思いを表した漢字1文字の書を札幌の地下道に展示

楽しいこと 共有しよう

ゲスト講師 元Jリーガー A-bank北海道代表理事

曾田 雄志さん

したのです。それをきっかけに、アスリート同士のネットワークが生まれ、A-bank北海道を設立。サッカーやバレー、バスケットなどさまざまな分野のアスリートと協力し、北海道内各地の学校でスポーツ授業を行ったり、街中の歩行者天国で運動会を開いたりした。地域の活性化を後押ししています。自身についても積極的に声を掛けたり、私的活動をおもしろがってくれました。スポーツを通じて、楽しいことをみんなで共有できたらいいね」と話してくれました。

松本山雅は元気の源

松本山雅がサッカーJ1に復帰しました。まちの人は「共通の話題ができた」「試合を楽しみに仕事を頑張れる」と応援しています。山雅スタッフで元選手の鉄戸裕史さんは「温かく迎えてくれた地元に戻りたい」と話しました。(植野瑛太・長野)



マラソン大会2万人

札幌で夏に開かれる「北海道マラソン」には約2万人ものランナーが参加。スタート前のカウントダウンをさぼるテレビ塔で行うことなどが、地元で人気の理由です。ぼくの家の近くにコースがあり、選手を間近に見ることができます。(中丸皓太・北海道)

プロ女子バレー 誕生

野球やバスケットのプロチームがある仙台に昨年、女子バレー「リガール仙台」が誕生。仙台出身の佐藤あり紗選手を中心に、Vリーグ参戦を目指します。コンビニが壁を広告で飾るラッピング店舗をするなど、地域も盛り上げています。(奥村史織・宮城)

地元も栄える新球場

スポーツは見るのも楽しい。2023年、北広島市にプロ野球北海道日本ハムの「ボールパーク」ができます。新球場を中心とする施設で、市の担当者によると、自然と調和する工夫をし、北広島駅近くも栄えていくそうです。(山本みのり・北海道)

ボランティア 支えに

愛媛には、サッカーJ3入りを目指すFC今治があります。ホーム戦を支えるボランティア組織「ボヤージュ」には、小学生も参加しています。監督は「チームが苦しい時も応援してくれるので、力をもらっている」と言います。(河田拓実・愛媛)



広がれスリッパ卓球

松江市の玉造温泉街では、ラケットの代わりにスリッパで球を打つスリッパ卓球の大会「世界スリッパ卓球ダブルス選手権大会」が開かれています。コスプレで参加する人もいてとても盛り上がりませんが、もっと広く知ってほしいです。(和田愛花・島根)

◇このページは、北海道新聞社、愛媛新聞社が編集しました

わたしたちが取材しました



やまもと 山本みのり 記者 (北海道・小5)



なかもと 中丸皓太 記者 (北海道・小5)



おくむら しおり 奥村史織 記者 (宮城・小6) 河北新報社



うえの えいた 植野瑛太 記者 (長野・小6) 信濃毎日新聞社



わだ あいか 和田愛花 記者 (島根・小6) 山陰中央新報社



かわだ たくみ 河田拓実 記者 (愛媛・小6) 愛媛新聞社

スポーツ × 地域振興 ちいきんこう ②

全体会では緊張しながらもハッチリ発表!! 3月、東京都の日本科学未来館



チーム提言

スポーツの力と、自分のまちの魅力を知って、結びつけて、自信を持って広める!

▼あすからわたしができること▼

いろいろな大会について調べ、自分からできることをする

いろいろなイベントに参加して、PR活動やボランティアをする

ボランティアで落ちているゴミを拾ったり、PRする

「こんなこともできるんだ」という気持ちを持ってもらう!

言語をたくさん学んで、自信を持って街を案内する

生かそう! スポーツの力



あまの 天野 春果さん

「アンテナを張って」

天野さんは2020年の東京五輪・パラリンピックをもっと面白い大会にするため、もっといろいろな人に興味を持ってもらうための企画を進めています。その一つが「東京2020 0算数ドリル」。小学6年生が学校で使うドリルに選手が登場し、競技と算数を楽しく学べるもので、都内を中心に活用されています。宇宙の無重力状態でパラ漫画はできるのか、と呼び掛けました。

プロフィール

Jリーグ川崎フロンターレで地域に愛されるクラブづくりに尽力。2017年から東京五輪・パラリンピック組織委員会に出向し、イノベーション推進室エンゲージメント企画部長として「わくわくドキドキする大会」にするための企画を進めています。

スポーツで地域を元気にするために自分たちができることは。分科会「地域振興②」チームのテーマは「スポーツでわくわくのまちに」。7人の子ども記者がスポーツを通じた地域振興について話し合いました。ゲストティーチャーに東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の天野春果さんを迎え、一緒に「スポーツの力」を探りました。

子ども記者7人が事前に調べてりしたこと、広島県で女子サッカーきたことを発表。沖縄県ではプロローグなどしチャレンジャーのア野球のキャンプで冬でも観光客がインジュヴィオレ広島を支える町の増えたり子どもたちが夢を持った人たち、静岡県と大分県で今秋開の提言をまとめました。

かれるラグビーワールドカップ(W杯)を盛り上げるための市民や行政の取り組み、徳島県の「野球のまち」阿南市で60歳以上の女性らでつくるチアリーディングチーム「ABO60」の活動を紹介しました。

その後、子ども記者は「みんなに伝えたいこと」「あすからわたしができること」を考え、チームの提言をまとめました。

スポーツの良さを知り、みんなにスポーツの良さを広める

外国語を覚えて、海外の人たちとコミュニケーションを増やす

明日から私ができる事は英語や韓国語を勉強することです。

◇このページは、大分合同新聞社が編集しました

わたしたちが取材しました





資料を見ながら、真剣に議論する様子

「応援」だってボランティア

対戦相手にもいっぱい拍手!

「僕たちができることってなんだろう?」。分科会「支える」のテーマは「こどもにできるボランティア・応援」でした。6人のこども記者たちは、2人のゲストスピーカーの体験を身乗り出して聞き、議論を重ねました。

ゲストスピーカーの1人目は、夏冬合わせて三つのオリンピック(五輪)でボランティアをした西川千春さん(58)。西川さんは「ボランティアは大変なこともあるけれど、選手と一緒に喜んだり、泣いたり、世話をした人から『ありがとう』と言ってもらえたり、僕にとっては一生忘れられない思い出です。2人目、安英学さん(40)の祖父は北朝鮮の出身で、

西川さん 一生の思い出に



資料として、西川さんからロンドン五輪のボランティアユニホームなどを見せてもらいました

■西川千春さん……笹川スポーツ財団特別研究員。経営コンサルタントとして働きながら、2012年ロンドン、14年ソチ冬季、16年リオデジャネイロと、五輪の3大会でボランティアを務めた。

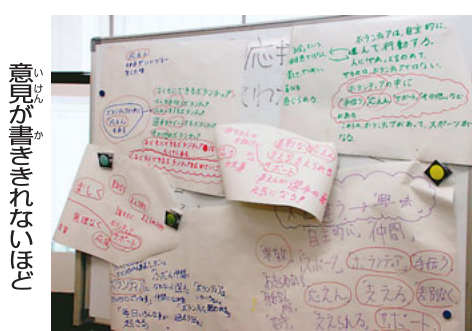
安さん 選手の心の支え

分は日本で生まれ育ちました。2002年、Jリーグのアルビレックス新潟で活躍している時、北朝鮮が日本人を拉致(無理やり連れて行くこと)したことを認めました。北朝鮮を非難する声が高まり、チームには「安選手を試合に出すな」などと抗議がききました。「でもチームが僕を守り、サポーターは『イギョラ(頑張れ) アンヨンハ』と



安さんの話に聴き入るこども記者たち

■安英学さん……元Jリーガー。ジュニスターサッカースクール代表。朝鮮籍の在日3世。Jリーグの新潟、名古屋、韓国Kリーグなどでプレー。2010年南アフリカワールドカップ(W杯)には北朝鮮代表として出場。



意見が書ききれないほど

「差別なく」が大事

話を聞いたこども記者たちは、「ボランティアは、選手と一緒に大会を支える一員なんだと分かりました」(川崎葵衣さん)。「応援には、選手の方にメリットもあれば、ボランティアはたくさんある」「応援だってボランティアのひとつ。相手の国がいいプレーをしたときにたくさん拍手をしよう」と整理しました。チームの提言は「応援もボランティアも同じサポート。子どもにできるボランティアを広めていこう」とまとめました。

◇このページは、毎日新聞社が編集しました

わたしたちが取材しました



かさはらたいぎ 笠原大義 記者 (埼玉・小6)



よしたりょう 吉田涼 記者 (石川・小6)



おおかわらはるき 大川原陽輝 記者 (福島・小6)



さのここみ 佐野心美 記者 (京都・小6) 京都新聞社



たなべいっぺい 田辺一平 記者 (岡山・小6) 山陽新聞社



かわさきあおい 川崎葵衣 記者 (高知・小5) 高知新聞社

いっしょに体験し もっと知ろう!

障がい者スポーツを楽しむには——。この問いに答えるため、こども記者たちは、車いすラグビーの体験を通して障がい者スポーツの魅力を知りました。選手の話も聞いて、ふだんからかかえる課題を知り、解決策を話し合いました。

車いすラグビー やってみた!

ボールをキャッチしたこども記者が車いすで走りだしました。相手チームの車いすが近づいてタックルすれば、「ガシャン!!」と大きな音がひびきます。迫力満点です。ただ、専用の車いすには補強がしており、音に比べて衝撃は大きくありません。

音がすごくてびっくり!

どんだんタックルできたよ

やってみると楽しい

車いすの幅は思ったより大きい。うまく通れないことも



選手といっしょにゲームに挑戦するこども記者=東京都江東区

知ること理解を深める

取材を終えたこども記者は、①障がい者スポーツの魅力は何か②どんな課題があったか③どうしたら解決できるか、それぞれ意見を出し合いました。

意見が多く出た中で共通していたのは、今回の取材のように、障がい者スポーツに触れる機会があれば理解は深まるはず、ということです。

障がい者スポーツを知ることから始め、できればそこにに関わり、助け合うことが大切。そんな思いをこめ、みんなで「いっしょに体験し、いっしょに助け合い、もっと知るチャンスを増やそう!」という提言にまとめました。



似たような意見を整理するこども記者とおとな記者

取材した!

金メダルで「ありがとう」を

分科会「共生」のこども記者7人は、日本代表チームでも活躍する今井友明選手(36歳)、中町俊郎選手(24歳)といっしょにプレーしました。今井選手と中町選手は、ともに手が足の一部に「まひ」があります。今井選手が車いすラグビーを始めたのは、「みんなを取り組むチームスポーツだったことと、世界を目指せる競技だったから」と言います。

2016年にはブラジルのリオデジャネイロ・パラリンピックで銅メダルを取りました。今は20年の東京パラリンピックを目指しています。しかし両選手は、練習場所がなかなか確保できないという課題があるといます。体育館によっては、床が汚れたり傷ついたりするとして断られることもあるそうです。「たしかに、床が少し汚れることがあります。転ぶこともありますが、ただほかのスポーツでも、汚れや傷はできるもの。車いすラグビーをもっと知ってもらえれば、ほかのスポーツと変わらないとわかるはず」と話します。

「障がい者にかがらず、みんなもきつと誰かに支えられて生きている。でもそれってふだんは忘れがち。相手に感謝し尊敬することは、みんな同じ」と今井選手が教えてくれました。



車いすラグビーの選手に取材したこども記者たち

◇このページは、朝日学生新聞社が編集しました

わたしたちが取材しました



すえきりおん 末木里穂 記者 (神奈川・小6)



おだたいじろう 小田泰次郎 記者 (福岡・小5)



わたなべこうすけ 渡辺康介 記者 (新潟・小6)



新潟日報社



かねこ 金児ゆず 記者 (長野・小5) 信濃毎日新聞社



いよもりとしき 伊與森星希 記者 (鳥取・小6) 新日本海新聞社



すがはらえまな 菅原永愛 記者 (宮崎・小6) 宮崎日日新聞社



なかもほあき 仲嶺瑛梨 記者 (沖縄・小5) 沖縄タイムス社

みんなスポーツを楽しんでいるね



スポーツをテーマにした「第3回小学生新聞サミット」の議論に役立てるために、参加した27新聞社が共同で読者の小学生へのアンケートを行いました。集まった約1万2500の回答から、さまざまなスポーツに親しみ、来年にせまった東京オリンピック(五輪)・パラリンピックを楽しみにしている子どもたちの姿がうかがいあがってきました。

小学生が好きなスポーツ選手のトップは、フィギュアスケートの羽生結弦選手でした。左のイラスト上を見てね。結果を聞いた羽生選手は「ありがとございませす」とよるこび、去年の韓国・平昌冬季五輪で2大会連続の金メダルにかがやいたからではないか、と分析しました。「これからもチャンピオンらしくすべりたい」と応援を力にしています。

2位は大坂なおみ選手、3位は錦織圭選手で、プロテニス界で活躍がめざましい2人が続きます。大坂選手を好きな1147人中1008人を女子が占め、女子の中で

人気トップは羽生選手

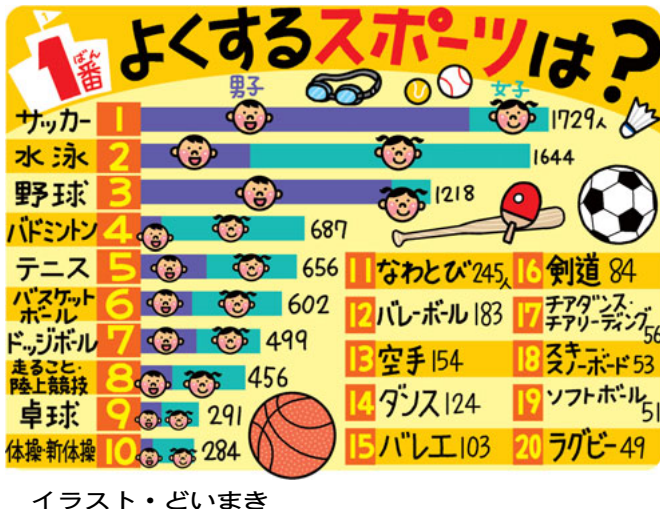
は1位の人気。4位の大谷翔平選手(アメリカ・大リーグ)は、男子の人気ナンバー1です。5位には、2月に白血病を公表した競泳の池江璃花子選手が入りました。

男子はサッカー、女子は水泳

「スポーツをするのと、見るのはどっちが好き?」という質問には、「するのが好き」が32・6%、「見るのが好き」が16・1%でした。最も多いのは「両方好き」の46・2%で、すべてをあわせると約95%が「好き」と答えています。

スポーツを「するのが好き」「両方好き」と答えた子に「一番よくするスポーツ」を聞いたところ、1位はサッカー、2位が水泳、3位が野球でした。左のイラスト上を見てね。男子のトップ3は、サッカー、野球、水泳、女子は水泳、バドミントン、バスケの順です。

◆アンケートの方法 27新聞社の読者の小学生を対象に1月1日〜2月21日インターネット、ほかき、質問紙で実施。有効回答数は1万2488。



より良い未来へ、もっと話そう

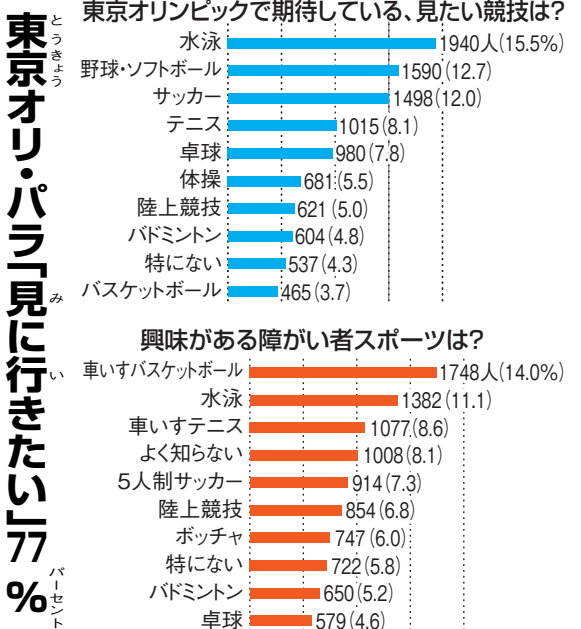
スポーツが「好き」という子が95%と、とても多いことにまず安心しました。汗をかくって気持ちいい、仲間が増えるってうれしいなという体験を重ねて、その気持ちはずっと持ち続けてほしいと思います。

スポーツは、人生を豊かにしてくれる伴走者。つき合っていくには、どうしたらいいのでしょうか。小学生のみなさんには、家や学校でもスポーツのことを話してアイデアを発信してほしいと思います。みなさんの力がスポーツ界をより良くし、まわりの大人たちも元気になれるはずですよ。

スポーツジャーナリスト・増田明美さんの話

「東京五輪・パラリンピックを見に行きたい?」という質問には77・7%が「はい」と答えました。五輪競技は、水泳、野球、ソフトボール、サッカーなど、身近な競技が人気。興味がある障がい者スポーツは、まんがにもなった車いすバスケットボールがトップでした。右のグラフを見てね。

「東京五輪・パラリンピックを見に行きたい?」子どもたちの間では59・3%の間にのぼりました。



ロボット科学教育クレファス

広報担当 藤本普也さん

科学もスポーツも、ふたつの働きがあります。健康的な生活の維持と限界への挑戦です。そのふたつをうまくつなげる鍵は、好奇心、そして人の心や気持ちを知ることです。科学の使い方を知り、スポーツの使い方を知り、心も体も健康にいきましょう。

子ども新聞サミットを応援しています

三菱商事

サステナビリティ・CSR部 今井友明さん (車いすラグビー選手)

子ども記者のみなさん、車いすラグビーの体験はいかがでしたか? 車いすがぶつかり合う迫力ある音や衝撃など、ほかでは味わえない魅力があります。まずは知ることが大事。体験したみなさんから魅力を伝え、たくさんの方に興味を持っていただけたら幸いです。

公文教育研究会

グローバルネットワークチーム ケイモンさん(左) ジェーン・チョンブーウォンさん(右)

子ども新聞サミットは、21世紀を生きる子どもたちに求められるコミュニケーション力、コラボレーション力、批判的思考力が身につけられる貴重な機会だと思います。大人になっても今回のような学びを大切に、自分の目標達成に向けてがんばってください。